

ヒノキ花粉症対策品種の種子の効率的生産

【特徴】

ヒノキは本県の林業で最も植栽が多い樹種であるが、花粉症が大きな社会問題となっている。今後、雄花の着花が少ない花粉症対策品種を植栽する必要があり、その種子の効率的生産方法を開発した。

【活用が見込まれる分野】

雄花の着花が少ない個体の普及によるヒノキ花粉飛散量の減少

【成果】

ヒノキ花粉症対策品種の普及

県内で配布した約20kgのヒノキ種子のうち、20%に相当する4kgの花粉症対策品種の種子を生産、配布(平成28年度)

【技術内容】

花粉症対策には、雄花の着花が少ない品種を普及する必要があるが、同時に種子の確保が難しくなる。



効率的に種子を生産するために、着花をできるだけ促進する方法を開発するとともに花粉散布処理方法の検討により種子の発芽率向上(高品質化)を図る。

着花促進方法の開発

根域制限による着花促進



通常の植栽



コンテナを用いた根域制限による植栽(採種木の育成)

薬剤処理による着花促進

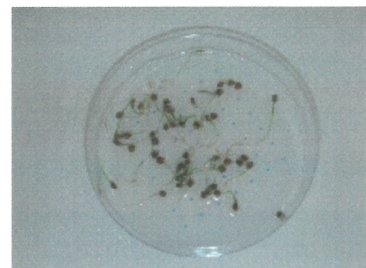


ジベレリンペースト包埋処理

根域制限、および薬剤処理により、着花が促進された。また、根域制限により、樹型がわい化し、受粉施設への移動作業等が同時に軽減された。

花粉散布処理の検討

花粉散布回数、時期を検討することにより、種子量が増加するとともに、発芽率が50%(従来20%)に向上された(種子の高品質化)。



発芽検定